

## 感動を我がものに

同窓会長 中村秀臣

母校、添上高等学校は創立 114 年目を迎えます。1906（明治 39）年、農林学校から農学校、そして現在の新制高等学校と歩んできました。

同窓会は 1955（昭和 30）年 8 月、農学校と新制高等学校の卒業生を合わせて組織された同窓会が新たに発足、その後、農林学校の卒業生を含められ、今日まで至っています。65 年の歴史のある同窓会です。

同窓会員は令和元年度で 2 万 2000 名以上となり、農業従事者はもちろん、教育界、政界、企業やスポーツ界など各方面で活躍されています。昨年度は 1970（昭和 45）年度より創設されました体育科（現在はスポーツサイエンス科）が 50 周年を迎え、11 月には記念式典が挙行政され、奈良県のスポーツ界を背負う人材の更なる育成を確認し合いました。

日本で 2 度目の開催になります東京オリンピック・パラリンピックが、令和元年度末から日本だけではなく、全世界へと拡大していった新型コロナウイルス感染により 1 年延期になりました。非常に残念であり、オリンピック・パラリンピックに出場、出場を狙っているアスリートたちはたいへん悔しがっていると思いますが、挫けず、来年に向けて選手たちは練習等に励んでいることが報道されています。大いに期待されることです。

観戦する側にとっては、日本選手の活躍でメダル獲得に沸き、また他国の選手の活躍にも、多くの感動を味わうと思いますが、何かしらその感動がその場、その日、その瞬間だけで終わっているような気がしてなりません。感動は一時的にはストレスを解消してくるでしょうが。

感動を受動的だけではなく、能動的に、今度は個々人それぞれの立場で努力して成し遂げ、感動を与えることが大切なのではないかと考えます。「あのことはその選手のことである。だから、自分には……」ではなく、自分を「すごいなあ、さすがだなあ！」と言わせることです。感動を他人事ではなく、自分のよりよい人生を送る糧にする必要があるのではないのでしょうか。「自分なら……」と。